

アトリエ 琉游舎 だより 46号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2019年2月13日発行

鰻魚を祭る

(かわうそ うおを まつる)

- ・立春後15日から啓蟄までの期間を二十四節気では「雨水」と呼びます。雪が雨に変わり氷が融けて水になる時期を表しています。もう冬ではありませんね。
- ・水が温み始める候は鰻祭魚（かわうそ魚を祭る）。かわうそが捕らえた魚を川岸に並べている様子が祭りの供物の様子にみえたことから生まれた季節の名前だそうです。水が温み魚が活動を始めると、それを待っていたかのようにかわうそも魚取りに励むようです。そして穫物を誇り感謝しているのでしょうか、川岸に魚を祭る。これが鰻祭魚。
- ・転じて多くの書物を調べ引用する様を示す言葉になりました。俳人正岡子規はいくつかの雅号を持っていましたがその中の一つが「鰻祭書屋主人」です。結核の病臥の枕元に多くの書物をおいてある様子が、かわうそのようだというでしょう。
- ・琉游舎の蔵書がまた増えました。さながら鰻祭魚のようです。祭った後の魚はおいしく頂かなければならないのですが、積読状態は当分解消されそうもありません。
- ・「鰻祭」と言えば日本酒。そして肴。こちらの方は周りに並べるだけ並べてもいつの間にか全部なくなってしまいます。琉游舎は魚も肴もお祭りします。お待ちしております。

春の彼岸会法要

3月21日（春分の日）10時半から

2・3月のスケジュール			木	金	土	日
			14 映画会 13:30	15	16	17
18	19	20	21 映画会 13:30	22	23	24
25 居酒屋の会 16時から	26 読書会 13:30	27	28 映画会 13:30	3月1日	2	3 写経会 13時半
4	5	6	7 映画会 13:30	8	9	10
11	12 読書会 13:30	13	14 映画会 13:30	15	16 詩話会 13時半から	17
18	19	20	21 彼岸会法要 10時半	22	23	24

読書会

2月26日(火)
3月12日(火)
13時半から

写経会

3月3日(日)
13時半から

詩話会

3月16日(土)
13時半から

映画会

毎週木曜日
13時半から

変だなあ

変だなあと思ったことを、何が変なのかよく分からないままに放っておいても気にならないのは、年のせいなのでしょうか。変だなあと感じたことを追求する根気がなくなつたのか。変だなあと思つても次の瞬間何を變だなあと思つたのかを忘れてしまふほどどうでもよいことだったのか。長年の経験で變だなあという気持ちが無駄な義憤へと膨らむ前に、思考シャットアウトの自己防衛本能が働いてしまうのか。特に最近は何だ変だなあと思う間もなく「あれ！何を變だと思つたんだろ」となることも増えました。これは明らかに年のせいですね。

「変だなあ」を行動に変えて異議を唱えることは若者の特権で、大人になることはその異議の矛先を納めて、社会という曖昧模糊とした境界線の中に身を丸くして納めていくことなのでしょう。学生の時に暮らしていた寮の壁にはそこかしこに「造反有理」の言葉が書き殴られていました。毛沢東の革命を肯定する言葉です。でも寮のそれは、モラトリアム学生の掛け詞にしか過ぎず、若者は就職という大転換を経て家族や会社、社会のために働いて尽くすことで一般的な日本人の大人になっていきます。もちろん私もその典型的な日本の大人のひとりです。この転換は挫折を伴うでしょう、しかしそれは若者たちに社会的な居場所を与えるための通過儀礼でもあったのです。

暴走族や学生運動という不器用な方法でしか「変だなあ」を表現できなかったかつての若者たちに比べて、現代の若者の異議申し立ては何と洗練されているでしょう。ネット空間の中で飛び交わされている匿名性が顕著なその異議の矢は、誰がどんな意図で放つたか相手には分からないため、射手が逆襲にさらされる危険性が少ない、安全地帯から放たれる矢です。それに比べたらかつての方法は「遠からんものは音に聞け、近くは寄って目にも見よ」という武士の「名乗り」の口上のごとく、自分の姓名・身分・行動の正当性などを満天下にさらす泥臭い方法でした。今のネット住人のように、安全地帯にいて異議の矢を放ち続けられたら、挫折を味あわずに済んだでしょうにね。先日のニュースに、東京五輪の海外訪問者輸送力増強のために羽田空港への進入路を変更する交渉に、アメリカがやっと思つて頂けるようだとありました。言うまでもなく日本の空は日本国のものではなくアメリカのもので、空が自分たちのものでなければその下の土地も自分たちのものであるわけがありません。んっ何か変ですか？ 異議を唱える人がいないことを念じて、私は今日も心穏やかに鰻魚祭りに興じたいと思います。

第三者

僧侶の立場からすると第三者と言う存在はあり得ません。というのも仏教の根本原理からすれば、全ての存在は「縁起の法」によって成り立っているからなのです。つまり世界の一切は「縁によって起り」直接にも間接にも何らかのかたちで、お互いは相互依存関係にあるという考え方です。私達は、生きているかぎりそこからひとり超然として、宇宙に起こる出来事に一切関係ないとうそぶくことはできないはずなのです。

このごろ都に流行るもの一つに第三者委員会というものがあります。昨年から今年にかけて、組織の暴力事件や不祥事などで頻繁にその存在を耳にします。何かあれば手っ取り早く第三者委員会を立ち上げて客観的な立場で原因を明らかにし、問題点を見極めて改善策を提示するという危機管理の手法です。報告書が出た後の評価はよくそこまで突っ込んだ提言ができたなどというものは稀で、大概は、まあここらあたりまでが限界かな、だって当の調査される側が選んだ「第三者」の報告書でしょう。物足りないけどここらを落とすしどころにしておかないとね。費用出す人のことを徹底的に追及するはずはないんだから・・・あたりが世間の納得のしどころのような気がします。組織の危機を管理する委員会に当の組織が資金提供してしかもスタッフ（もちろん委員の弁護士や有識者先生）も決めているわけです。私の長い会社員生活の中で、仕事はお金を提供する人（依頼者）の望むような結果を対価として提供することで成立していました。依頼者と被依頼者は第三者ではなく、利害関係者です。ましてや私の短い僧侶の経験では第三者という言葉はないわけですから、私にはこの委員会というものはほとんど見えないのです。依頼者は興行主でありプロデューサー、委員はスタッフ、危機を招いた当事者たちは主人公に悪役に脇役の役者たち。そして私達は観客に見立てられるでしょう。第三者という名の仲間うちの興行作品を、私たちは無責任に見世物として楽しんでいると考えればこれも一興ですね。

一流パフォーマーマンスばかり見せられるとたまには温泉場の大衆演劇も見たくありません。最近格好の田舎芝居が上演されました。グラフをごまかした尻拭いを両親（上司）の監視のもと赤の他人（第三者）に子供たち（部下）が拭ってもらっているという学芸会並みの田舎芝居でした。興行主（政府）の評価が高かったのかしら、続編はマイナーチェンジで近日上演されるようですが、楽しみに待っていていいものやらどうやら・・・